

現場の声  
Real Voice

戦争経験者の父を持つ中林利数さんに、当時の様子などをお聞きしました。

「実は、高山市も危なかったんですよ」

昭和20年8月2日午後9時半頃、市内に爆撃予告のビラがまかれました。当時の高山市は、木製飛行機の部品製造や、飛行機の性能研究などの軍事産業があったために標的になりました。ビラがまかれた4日後の8月6日には広島に、9日には長崎に原子爆弾が投下され、15日に終戦となりました。高山市もいつ爆弾が投下されてもおかしくない状況でした。投下されていたら、伝統的な町並みも焼失し、今のように観光地として多くの観光客で賑わうことはなかったと思います。

「残すことによって、あったことになる」

私の父は、中国へ出兵し、足を負傷し帰国しました。父からの戦争の話は、ほとんどありませんでした。父の亡き後、遺品を整理したところ、手帳を発見。当時の様子が生々しく書かれています。きっと、父は戦争があまりにも恐ろしくて話すのも思い出すのも嫌だったでしょう。記者の仕事をしていたので、世の中に出すべきか迷いましたが、書籍「戦傷奏八杖」として出版しました。

終戦から76年。いつまでも戦争を忘れることなく、この当たり前の日常を、大切に過ごしています。



戦争は他人事ではない。いつまでも忘れないで



たなか はるき 田中 陽貴 さん (高山西高校)



こばやし りおん 小林 利桜 さん (高山西高校)



いわこし じょうたろう 岩腰 丈太郎 さん (斐太高校)



標高の高い乗鞍岳で行われていた飛行機の性能研究

木製の飛行機部品をつくる様子



市内にまかれた爆撃予告のビラ